

体温と豚

大松 達知

お風呂のお湯を一晚中三十六度に保ち続ける、と聞くと、とてももったいない気がする。

しかし、それと似たようなことを 二十四時間、三百六十五日、何十年もやり続けるのが人間の体なのだ。成人の体の六十五%くらい、老人の体の五十五%くらいが水分だと言われる。とすると、例えばワタシは体重六十キロなので(ほんとです)、約四十リットル(湯舟の五分の一くらい)の水分を休みなく温めつづけていることになる。それってすごいことじゃないですか。

もちろん、その熱の源はすべて食べ物。人間は食べ続けることで体温を保つ。だからお腹が空く。

愛憎の汁なし担々麵啜るテロのニュースの間こえる部屋で

佐佐木定綱『月を食う』
人の世のどろどろ魚介つけ麵を特盛にして苦しんでいる

『月を食う』は食べ物の歌に勢いがある。ただ、登場す

るのは、牛丼、ラーメン、つけめん、どん兵衛、酸辣湯など、炭水化物ぐいぐい系の食べ物がほとんど。独身三十代男性の食事らしいと言うとジェンダー問題に触れるかもしれない。でも、どれも体温が上がりそうな食べ物だ。

その中の麵食二首。一首目は「愛と憎しみの」と大きく出て揺さぶるところが愉快。かつて天秤棒(担々)で担いで売り歩いてきたから(担々麵)。もともととは汁なしで、日本では陳健民さんが汁を入れたのが最初だとも聞く。だから(汁なし担々麵)は先祖返りした、二重のレトロニムなのだ。二首目は「人の世の」が「どろどろ」を導き出している。特盛は大盛よりもさらに盛ったもの。牛丼の吉野家では大盛りの上に(メガ盛)もある。安くうまいもので腹を満たしたいニーズへの対応。上品ではないけれど、人は胃袋で生きているんだ!と訴えかける言葉だ。

網上の豚の破片に血がにじみまたひとつ喰う 知らなかつた「死」

焼肉をしながら、屠畜の過程を思っているようだ。いつのまにか破片になってゆく生き物。かつてはその体には血が流れ、体温(三十九度らしい)と意思をもってブヒブヒと動いていたはず。われわれは彼らに生かされている。そんなことまでをリアルにぶつきらぼうに含羞をもって歌っている。食べるとは、彼らの体温を受け継ぐことへの感謝でもあると思つた。